

青森県立美術館開館5周年記念展

青木淳 × 杉戸洋展 (仮題)

プレスリリース No.1

<http://aokixsugito.com>

※ リリースの内容および掲載している画像の使用等に関するお問い合わせは、下記までお願いいたします。

問い合わせ先：青木淳 × 杉戸洋展実行委員会事務局（青森県立美術館内）

〒038-0021 青森市安田字近野 185

Tel 017-783-3000

Fax 017-783-5244

展覧会特設サイト <http://aokixsugito.com>

E-mail bijutsukan@pref.aomori.lg.jp

総務担当：経営管理課 小笠原

広報担当：経営管理課 藤本

学芸担当：美術企画課 高橋、工藤

青森県立美術館
AOMORI MUSEUM OF ART



展覧会そもそも

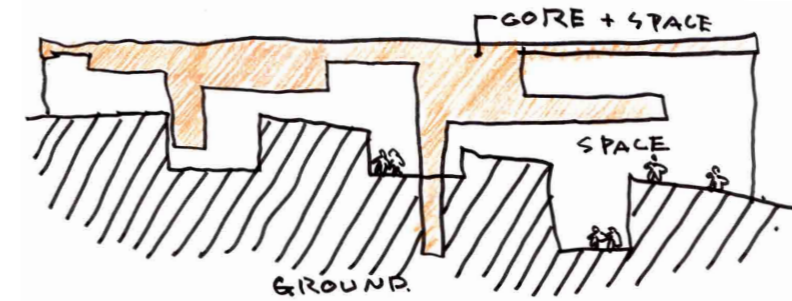
1. なぜ、建築家・青木淳の展覧会？

2011年、青森県立美術館は開館5周年を迎えます。この節目の年に、美術館のハード、ソフト両面での可能性を最大限に活かし、今後の美術館活動の展望を切り開く、新しい形の展覧会を開催します。

青森県立美術館をはじめとする公共建築だけでなく個人住宅、商業施設など、多岐にわたって独創的な設計を行ない、高い評価を得てきた建築家・青木淳、絵画の新たなありようを提示し、国内外で注目されてきた画家・杉戸洋。

二人のアーティストが、青森県立美術館の空間の魅力をより強く引き出すことを共通の目標に、建築と美術の垣根をこえて理想的な展覧会を作り上げる、これまでにない趣向の建築展です。

青森県立美術館の展示空間に未知の可能性を信じる建築家と、作品と空間の関係を突きつめてきた画家によるこの展覧会は、青森県立美術館の建築空間の魅力をあらためて私たちに示すとともに、これまでの美術館における展覧会のあり方に一石を投じるものとなるでしょう。



2. 青木淳《青森県立美術館、コンセプト・スケッチ》
1999年 © 青木淳建築計画事務所

2000年、青森県立美術館の設計競技（審査委員長・伊東豊雄）には、400件近い空前絶後の数の応募案が集まりました。最優秀賞に選ばれたのが、青木淳による案でした。隣接する三内丸山縄文遺跡の発掘現場に着想を得て設計されたその美術館建築は、收藏する数々のユニークな美術作品とともに、いまや青森県立美術館の大きな魅力となっています。

開館5周年という節目を迎える2011年、青森県立美術館はその建築に光を当て、空間の特性を最大限に活かした展覧会を、設計者の青木淳とともに企画することにしました。

2. なぜ、「× 杉戸洋」？

青森県立美術館自体、青木淳という建築家の作品にほかなりません。でも、この展覧会の目的は空っぽの空間を体験してもらうことではありません。美術館という建築作品は、そこで展覧会が行われることではじめて成り立つもの、と青木淳は考えます。展示作品を鑑賞することが、青森県立美術館の空間の魅力を味わうことと直結するような展覧会。それを実現するために、青木淳が招いたのが、画家の杉戸洋です。ふたりが仕事を一緒にするのはこれが初めてですが、青木は今まで杉戸の作品を見ながら、あるいはなにげない会話の中で、空間や展覧会について、共有できるヴィジョンを抱いていることを感じていました。今年に入ってから頻繁な対話を通じて、空間について、作品について、そもそも展覧会とは何かについて、考え続けてきたふたり。その親密なコラボレーションから、今、新たな展覧会のかたちが、そしてもう一つの「青森県立美術館」の姿が立ち現れようとしています。

3. どこが、「これまでにない趣向の建築展」？

最近、美術館やギャラリーで、建築展が大はやりです。建築模型、図面、写真が中心の従来型の建築展から、建築家のインスタレーションや1分の1模型で実際の空間を体験するものまでさまざまです。

しかし、本展の主役は、「青森県立美術館」の建築そのものです。そして、建築家・青木淳と画家・杉戸洋が、その建築が本来持っている魅力を、それぞれの立場を越えて、展覧会という形で引き出します。作品のために建築があり、建築のために作品があるような関係が生まれます。作品と建築が継ぎ目なく融合する、これまでにない建築展です。

[概要]

- 1 名称 青木淳 × 杉戸洋展（仮題）
- 2 会期 2011年4月23日（土）～6月12日（日）
- 3 会場 青森県立美術館
- 4 主催 青木淳 × 杉戸洋展実行委員会
- 5 後援等 NHK 青森放送局、JR 東日本盛岡支社 ほか
- 6 併催事業 シンポジウム、ワークショップ等を予定



1. 青木淳《青森県立美術館》2006年 © 阿野太一

みどころ

■ 建築家と画家の緊密なコラボレーション

青木淳と杉戸洋は、幾度となく、また、くまなく、青森県立美術館を歩き、展示のアイデアを出しあってきました。そのコラボレーションによって生まれる作品が展示されます。たとえば、美術館の屋外に設置される「ボヨヨンな小屋」。当初青木が計画していたものの、結局は実現しなかった青森県立美術館の滞在アトリエのプランと、杉戸のランドスケープのヴィジョンが重なることで、まぼろしのような小屋が出現し、美術館のあらたな風景を作り出します。



3. 青木淳《ボヨヨンな小屋、イメージ模型》
2010年 ©青木淳建築計画事務所

■ 青森県立美術館のもうひとつの顔

展示室にとどまらず、屋外空間や普段は一般の人々が足を踏み入れることのないバックスペースまで、青森県立美術館全体を使う展覧会です。展示ルートも、通常とは異なります。忘れられた路地のような空間に出会ったり、現代彫刻を思わせるようなダイナミックな空間に突然抜け出たりする経験が待っています。青木淳がこだわった設計の秘密が見えてきます。



4. 青木淳《青森県立美術館》2006年 ©阿野太一

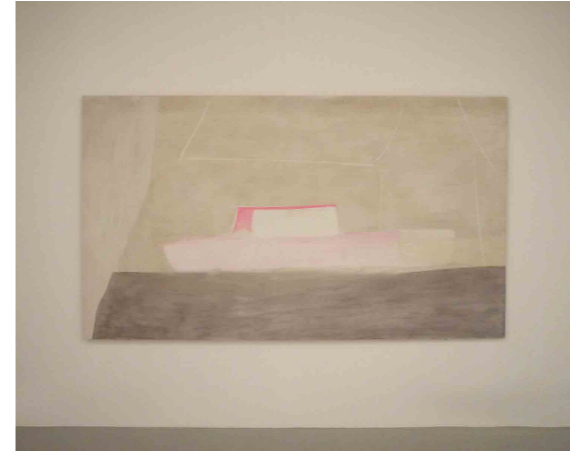
■ 青木淳にとっての「青森県立美術館」ができるまでとそれから

2000年にコンペで選ばれてから2005年竣工にいたるまで、青森県立美術館建設の道のりは平坦なものではありませんでした。変更を余儀なくされた設計、実現されなかった設計なども含めて、青森県立美術館のできるまでを、建築模型や図面、写真などで紹介します。また、この美術館を手がけたことが、その後の青木淳の設計に大きな影響を与えています。最新の青木の仕事を紹介しながら、青森県立美術館で形になったアイデアが、その後どのように展開されているのか、ご覧いただけます。



5. 青木淳《ハترون紙の家、イメージ模型》
2010年 ©青木淳建築計画事務所

■ 杉戸洋の新作がいっぱい



6. 杉戸洋《pink Continental》2008年 140.3×245cm
キャンバス・アクリル、パステル
©Hiroshi Sugito

1990年代後半から、松井みどりやジェリー・ソルツ（『ニューヨーク・マガジン』）など、国内外で名だたる批評家によって注目されてきた杉戸洋。繊細な線描と色彩で、現実の延長上にある異空間を描き出し、絵画のあらたなありようを提示してきました。現代日本を代表する画家として、高い評価を得てきた杉戸ですが、これまで公立美術館での大きな展覧会は開催されることがありませんでした。

発表してきた作品の多くは、アクリル絵具や顔料を用いた絵画でしたが、展覧会の準備で青森に足を運び出してから、油彩画の制作にも力を注いでいます。この展覧会には、こうした油彩画や立体作品などの新作が多数出品され、これまでの杉戸洋展では最大規模のものとなります。

■ 幻のコンペ案実現!! 舞台背景画「アレコ」をシアター席で鑑賞



7. 青木淳《青森県立美術館、コンペ応募案》2000年 ©中川敦玲

青木淳の設計案が最優秀賞に輝くことになった決め手のひとつは、シャガールの「アレコ」の、そのドラマチックな展示方法でした。「アレコ」が展示されるホールとシアターを隣合わせ、その間の壁を可動にし、それら二つの空間をつなげることができるようにする。それが青木の提案でした。そうすることによって、シアターの舞台裏の壁が開け放たれ、舞台背景画として制作された「アレコ」が、まさに「舞台の背景」として観賞できるのです。

しかし、この展示の仕方は、開館来、運営上の理由から実現の機会をみずにきました。その幻のコンペ案を今回の展覧会にあわせて実現します。

※ マルク・シャガールによる舞台背景画「アレコ」について
ロシア生まれのユダヤ人で、20世紀を代表する画家であるマルク・シャガール(1887-1985)が1942年に、亡命先のアメリカで制作したバレエ「アレコ」のための舞台背景画。全4幕から成る舞台背景画中、第1幕、第2幕、第4幕を青森県立美術館が収蔵し、美術館の中心にある「アレコホール」に展示している。縦約9m、横約15mの大画面に、「色彩の詩人」とよばれるシャガールの本領がいかに発揮されており、観るものを圧倒する。

□ カタログ

カラー約120ページのカタログを発行。展示作品、展示風景、スケッチなどを、二人のアーティストが自ら撮影し、ページ構成します。また、現代美術批評の第一線で活躍する清水穰氏のテキストを掲載。展覧会の全貌と作家の創造世界、そして青森県立美術館の目指すものが、一般の人々にわかりやすく伝わるカタログを製作、頒布します。



8. 杉戸洋 2009年 キャンバス・油彩 ©Hiroshi Sugito

作家紹介

青木淳 あおき・じゅん

1956年横浜市生まれ。82年東京大学大学院修士課程修了。83～90年磯崎新アトリエに勤務後、91年に青木淳建築計画事務所を設立。個人住宅をはじめ、公共建築から商業施設まで、多岐にわたる独創的な設計が高い評価を得てきた。

初期の代表作としては、プール施設「遊水館」(1993)、第8回くまもと景観賞を受賞した「馬見原橋」(1995)、日本建築学会作品賞を受賞した「潟博物館」(1997)がある。

「ルイ・ヴィトン 名古屋栄店」(1999)に始まる、「ルイ・ヴィトン 表参道店」(2002)、「ルイ・ヴィトン ニューヨーク フィフスアヴェニュー」(2004)など、ファッションブランド「ルイ・ヴィトン」の一連の店舗で取り組んだ設計では、モアレの効果を利用した知性あふれる瀟洒な外装が「ルイ・ヴィトンの顔を変えた」と言われる。

2000年に行われた青森県立美術館の設計競技では、393件の応募の中から、最優秀賞に輝いた。青森県立美術館は2005年に竣工、翌年7月に開館した。

近年では、アートの領域にも活躍の幅を広げ、『現代美術への視点 連続と侵犯』展(2003、国立国際美術館)にアーティストとして参加し、2009年にはTaro Nasu画廊(東京)で個展『夏休みの植物群』を開催した。また2010年春に竣工した集合住宅「Maison AoAo」(吉祥寺)では、彫刻家・青木野枝の作品を取り入れた設計が、大きな話題をよんだ。現在、「大宮前体育館」のプロジェクトが進行中。

2004年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

[著書・作品集]

2000年 『青木淳 Atomospherics』(TOTO 出版)

2004年 『青木淳 JUN AOKI COMPLETE WORKS 1: 1991- 2004』(INAX 出版)

2004年 『原っぱと遊園地』(王国社)

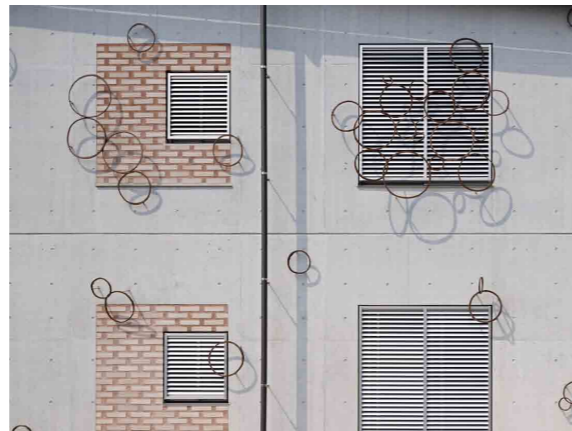
2006年 『青木淳 JUN AOKI COMPLETE WORKS 2: Aomori Museum of Art』(INAX 出版)

2006年 『青木淳 1991-1999』(彰国社)

2008年 『原っぱと遊園地 2』(王国社)



9. 青木淳《ルイヴィトン 表参道店》
2002年 ©阿野太一



10. 青木淳《Maison AoAo》
2010年 ©阿野太一

杉戸洋 すぎと・ひろし

1970年名古屋市生まれ。父親の仕事の関係で、4歳から14歳までの約10年間をニューヨークで過ごす。帰国後、美術大学への進学をめざし、通っていた予備校で、アルバイトの講師をつとめていた奈良美智と出会う。

入学した愛知県立芸術大学では、近代日本画の線や色彩の美しさにひかれて、日本画を専攻する。91年に名古屋市で初個展を開催。92年愛知県立芸術大学日本画科卒業。

美術家としての積極的な活動の展開は、90年代後半に入ってから。小山登美夫ギャラリー(96年～)、ケンジ・タキギャラリー(99年～)などでコンスタントに発表を続け、アメリカやヨーロッパのギャラリーでも個展を重ねている。

98年VOCA展奨励賞受賞。「既成の表現様式とはまったく無関係に、自己の感性を素朴なかたちで表現し」、「自己固有のイメージ世界をもっている」点が評価された。その翌年、時代と結びついたテーマで同時代のアーティストを紹介し、毎回話題をよぶ東京都現代美術館の「MOT アニュアル」シリーズの第1回、「ひそやかなラディカリズム」展(1999)に出品した。

アクリル絵具や顔料で塗られた淡く繊細な色彩が満たす広大な背景に、身の周りの具体的な物から想を得た極小のモチーフを描き込み、特異なパースペクティブを構築する杉戸の絵画。現実の延長の中に異空間を描き出すことで、絵の新たなありようを提示

してきた。近年では、ヴァンジ彫刻庭園美術館(2006)、テキサスのフォートワース美術館で(2006)個展を開催。「第8回イスタンブールビエンナーレ」(2003)、「第7回光州ビエンナーレ」(2008)などの国際展に日本を代表するアーティストとして選ばれるとともに、原美術館「ウィンター・ガーデン：日本現代美術におけるマイクロポップ的想像力の展開」(2009)、国立国際美術館「絵画の庭」(2010)など、現代絵画の動向を分析する重要な展覧会に出品作家として名を連ねている。

また、奈良美智との親交から弘前市吉井酒造煉瓦倉庫での「A to Z」展(2006)に参加。二年後には「シャギャーン」というユニット名で、奈良美智との実験的な共同制作による展覧会を開催している(ミサコ & ローゼンギャラリー、2008)。

作品は、東京都現代美術館、愛知県美術館、国立国際美術館などの国内の公立美術館や、サンフランシスコ近代美術館、エッセンのオルブリヒト・コレクションなど、海外の有数の現代美術のコレクションに収められている。

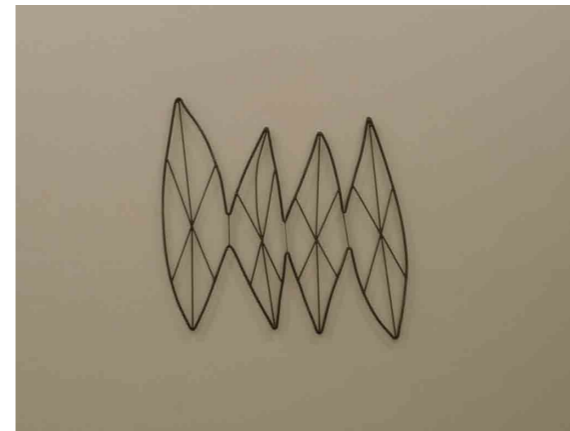
[作品集]

2000年 『under the shadow』(求龍堂)

2007年 『April Song』(フォイル)



11. 杉戸洋《first lightning》2008年
84×36×9cm 板・アクリル、ラメ
©Hiroshi Sugito



12. 杉戸洋《four leaves (はっぱ)》2008年 77.2×81cm 鉄
©Hiroshi Sugito

青森県立美術館開館5周年記念展
青木淳 × 杉戸洋展 (仮題)


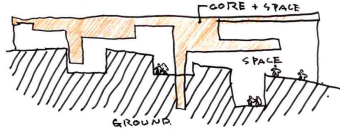





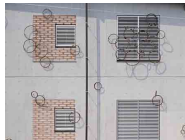


画像請求フォーム

画像はデータでご提供いたします。

希望される画像にチェックをいれ、媒体名、御社名、ご担当者、ご連絡先などをご記入の上、本用紙をファックスでお送りください。

to 青森県立美術館 広報担当行 (Fax 017 783 5244)

媒体名	
御社名	ご担当者
所在地	
電話	メールアドレス (データ送付先)

チェック欄	1	2	3	4
図版				
キャプション	青木淳《青森県立美術館》 2006年 ©阿野太一	青木淳《青森県立美術館、コンセプト・スケッチ》 1999年 ©青木淳建築計画事務所	青木淳《ボヨヨンな小屋、イメージ模型》 2010年 ©青木淳建築計画事務所	青木淳《青森県立美術館》 2006年 ©阿野太一
チェック欄	5	6	7	8
図版				
キャプション	青木淳《ハトロン紙の家、イメージ模型》 2010年 ©青木淳建築計画事務所	杉戸洋《pink Continental》2008年 140.3×245cm キャンバス・アクリル、パステル ©Hiroshi Sugito	青木淳《青森県立美術館、コンペ応募案》 2000年 ©中川敦玲	杉戸洋 2009年 キャンバス・油彩 ©Hiroshi Sugito
チェック欄	9	10	11	12
図版				
キャプション	青木淳《ルイ・ヴィトン 表参道店》 2002年 ©阿野太一	青木淳《Maison AoAo》 2010年 ©阿野太一	杉戸洋《first lightning》2008年 84×36×9cm 板・アクリル、ラメ ©Hiroshi Sugito	杉戸洋《four leaves (はっぱ)》2008年 77.2×81cm 鉄 ©Hiroshi Sugito

プレスイメージ貸し出し条件

1. 画像は、本展紹介以外の目的で使用しないでください。
2. 画像データを第三者に渡すことはできません。使用后、データは消去してください。
3. 作品写真は全図で使用してください。部分写真やトリミング、作品に文字を重ねることはできません。
4. 写真を掲載される際には、イメージ貸出時に添付するクレジットをご記載ください。
5. 掲載誌(紙)は、一部下記広報担当あてにご寄贈ください。Webサイトの場合は、掲載時にお知らせください。